

暮らしの学び舎

第4回

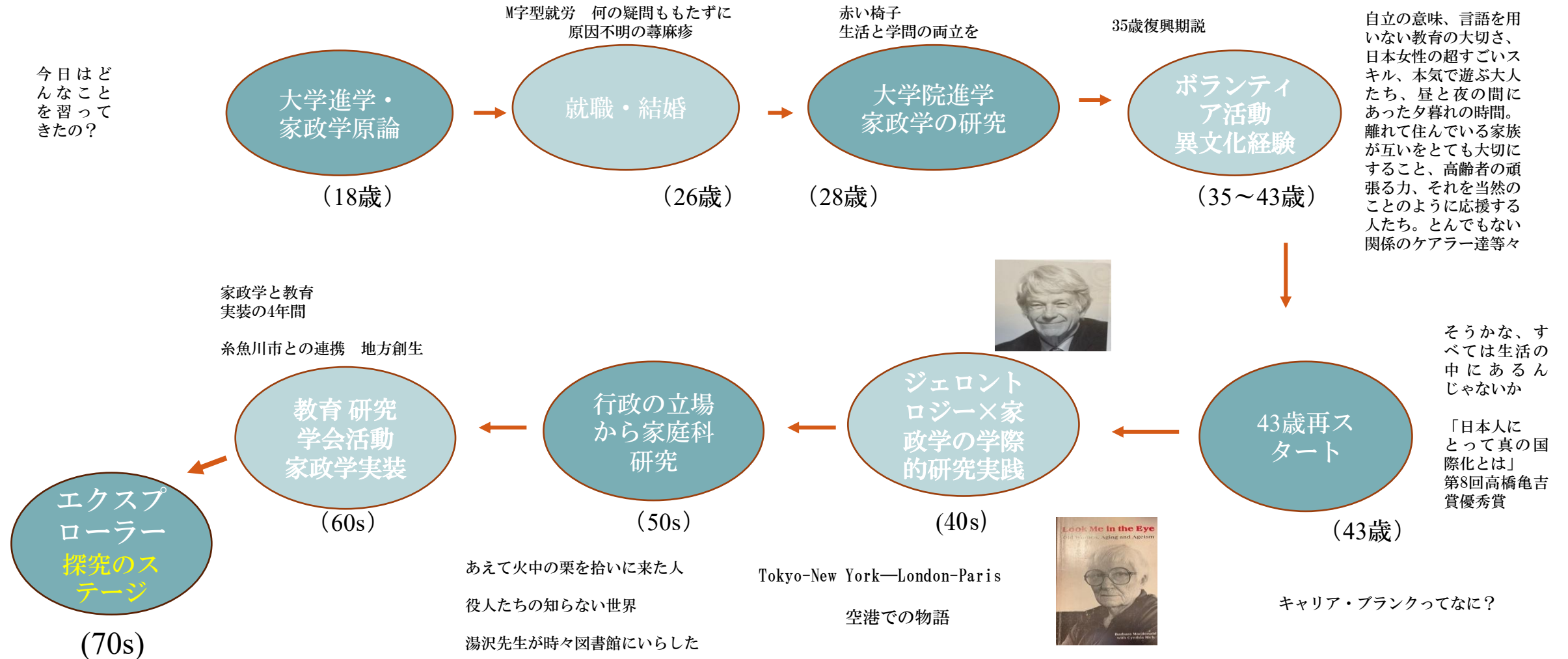
今 家庭科の先生方に伝えたいこと



工藤 由貴子

東京家政学院大学 家庭科教育研究所
(一社)日本家政学会家庭生活アドバイザー

「家庭科」は、ライフステージの折々に何度も出会える特別な学び



「家庭科」は、ライフステージの折々に何度も出会える特別な学び

これまで、繰り返し、「日本の家庭科」のすごさを感じた

日本人ママのスキルの高さ

学校のクラス復活の推進力となる

言語に抛らない教育の力

一方で、再考しなければならない課題も多い、と思ったことも

例えば、自立の捉え方

「自立と共生」が謳われるが、自立の捉え方が狭いまま、本当の意味での「自立と共生」はありえない
気遣うマナー

完成された自立した個人 vs 依存も支援も含みながら自分の生活を生きる主体

市民 vs 自然共同体の一員

本日の内容

1. 次期学習指導要領改訂の議論から
高まる子どもたちへの期待
広がる家庭科の可能性と課題の多さ
2. これからの“よりよい家庭科”への道
「家庭科を行おう」
3. 家政学の3つの総合性から導かれる家庭科教育の共通基盤
4. いったんのまとめ—ディスカッション



1. 次期学習指導要領改訂の議論から 高まる子どもたちへの期待

激しい変化が止まることのない時代を生きる子どもたち

一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする。

幼稚園から高等学校までのすべての学習指導要領「前文」

生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、
自らの人生を舵取りすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手となる

中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」（2025年9月25日）

1. 次期学習指導要領改訂の議論から 広がる家庭科の可能性と課題の多さ

以上のような教育の潮流をとらえると、

当事者として

「私たちはこうなりたい」「こういう社会をつくりたい」

より良い生活に向かって一人ひとりの力を発揮していく

家庭科の方法論、学習内容が教育全体に生かされることが鍵となる

(と私たちは信じている)

Empowerment 自分に力をつける 主体者となる

Well-being 身体的・精神的・社会的に良好な状態を求めていく

Advocacy 自分の課題を社会共通の課題としていく 一人ひとりの権利擁護

学校での学びが、子どもを変え、家庭を、地域社会を、社会を変えていく

次世代の社会を主体として創出する

教科横断的にカリキュラム・マネジメントの中核としても機能して

家庭科を共有し・広げていくこと

でも 募るもどかしさ

- ・ 今も家庭科はたくさんのことをしている。

でも、ほんとうはもっとできる。家庭科の可能性を最大限に発揮できていない

- ・ 私たちの説明

扱う範囲の広さ 時間軸 空間軸

細分化した領域ごとのアプローチだけでは教科の使命が達成できない

「総合化」が必要 ……言われていることは分かる。

でも、どうやって？ 難しすぎる

制度の問題

時間数のこと、教員不足のこと 専任でない教員が家庭科をやっていること

……まだまだ……

でも、家庭科をこのままにしていれば、何時間あっても、しんどさは変わらない

課題解決を超えて“より良い生活”を求めていく

生活の中のこわれた部分・問題に焦点を合わせ、

それを直す・解決する知識や技術を学び実践できるだけでいいはずがない。

「課題解決（あるいはその方法）」に焦点化される学習に留まれば、

それは今の社会に適応するための学習に矮小化される可能性がある。

子どもたちにとっては「もっともらしい答え」を探す機会になってしまうことも。

「課題解決型学習」から、課題を設定する力を求める学習へ

「特定の課題に対応しそれを解決する」を超えていく力

「家庭科の発想」

生活の課題に向き合って 自分はどのような存在であるべきか ありたいか を問う

そこから そのために必要な知識や技術、能力とは を問う

学び、探究し、実践する



2. これからの“よりよい家庭科”への道 「家庭科を行う」

「家庭科で行う」

から「家庭科を行う」への転換を



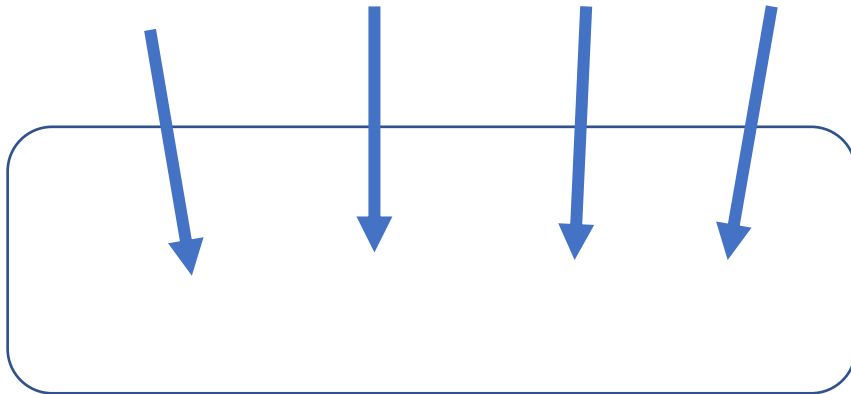
「家庭科で行う」VS「家庭科を行う」

家庭科で行う

家族・家庭、衣食住、消費環境という分野別構造の中に
様々な社会的課題を入れ込む

少子化、高齢化、生成AI等デジタル技術の発展

消費者問題、グローバル化、労働市場の変化、人生モデルの転換



少子化、高齢化、生成AI等デジタル技術の発展
消費者問題、グローバル化、労働市場の変化、
人生モデルの転換 etc.

家庭科を行う

家庭科教育の共通基盤（枠組み、方法、内容）
をもって社会的課題に向き合う・探究する



現代的・社会的課題に関する学習を家庭科で行おうとすると、
家庭科の学習内容・学習課題はますます広範囲にひろがり、内容也多岐にわたってしまう。

教師の負担増、児童生徒の負担増

しかし、もっと重大なことは、家庭科という教科の輪郭・存立基盤が曖昧になってしまうこと



「家庭科を行う」には「家庭科教育の共通基盤」が必要
それは「家政学の総合性から導かれる」

家政学の「総合性」

- (1) 時間軸の総合性
- (2) 主体形成の総合性
- (3) 「個人-家族・家庭生活—コミュニティを一つの視野におさめる」総合性

家政学 実践する専門家集団

家政学 Home Economics は世界各国で「科学」として「専門」として、それぞれの国の、社会・経済・文化・風土等を背景に多様な発展をとげている。

日本では

『家政学は・・・家庭生活の向上とともに人間開発をはかり、人類の幸福増進に貢献する実証的・実践的科学である』(日本家政学会 1970年)

家政学を構成する4つの領域

学問領域 研究を行い、新しい知識と考え方を創造する

日常生活 人間のニーズが満たされ、人々が成長と潜在力を発達させる日常生活の向上に寄与する

教育 一人ひとりが自らの生活資源と可能性（ケイパビリティ）に気づき、それらを育みながら、自分の生活や職業生活、そして人生を主体的に築いていくことを支える

社会的領域 個人や家族のエンパワーメント、ウェルビーイング、持続可能な未来の達成にむけて政策に影響を及ぼす

(1) 時間軸の「総合性」

人間の一生を生涯発達のプロセスと捉える

人の能力は生涯にわたって発達し続ける

Selective Optimization with Compensation
(補償を伴う選択的最適化)

人間の発達是多次元性・多方向性に富み、
生涯を通して新しい行動の変化が起こる

発達

- 発達 Development

時間的経過につれて、内にかくされていたものが徐々に立ち現われてくるプロセス

EX 写真の現像

- ただし、時間が経てば自然に生じるわけではない

その間の過ごし方が大事 何をしていたか

- どんな働きかけをしていたか／受けていたか 時間の中身が大事。

- 「発達は新しい生活環境に適応するために主体と環境との関係性を更新していくプロセスである」

(城仁士『高齢者の発達を支援する環境づくり』)

人間による主体的な周囲の環境との相互作用が大前提であり、

社会化の圧力を超える（環境の影響を超える）

人間ならではの発達のすがたがある。

人間の発達生涯にわたる

- 知能の発達のピーク 60歳代にある
- 発達は多次元性 多方向性(可塑性)である
- ライフスタイルも知能に影響する。
環境との相互作用 家族・友人・社会関係
- 知恵
ものごとの道理をわきまえていて適切にふるまう能力
経験を積んで豊かに花開く
状況分析 文脈理解 多様な価値観の理解 予測不可能性への対応・・・
知恵が高い人

「時間軸の総合性」の獲得は

「人間」の見方を変える

人は誰もが、生涯発達の過程にあり、ウェルビーイングを求めて生きている
すべての人：年齢・性別、健康状態・障がいの有無に関わらず

誰もが発達できる環境とは それをどう創るか

生涯を通じて発達が可能であるために、必要なもの・ことをみんなで、協働で創り出そう。

どのライフステージでも、どういう心身状態にある人でも「自分の意見をもつこと」は当然の権利。

意思決定はできているか、選択肢や情報は十分に得られているか、そもそも意思が尊重されにくい人、
意思を問われにくい人はいないか。

衣食住の生活の営みは生涯にわたる発達の原動力

進んでまわりの環境に働きかけ、相互作用を行う生活の主体性

環境への主体的な働きかけをすること 人間の発達にとってかけがえのない活動である。

「意識的に生活を営む」、「環境との相互作用」、「たくさんの人たちと関わる」

・生活課題や個人のニーズを一つのライフステージに限定してみない

その人を「今」の役割や状態で決めつけない。ライフステージを繋ぐ視点で。

生活課題やニーズ:人生の時間軸の中で再配置され、生涯にわたる継続的な人生の中で理解される。

・自立観の転換

× 自立＝他者からの独立・自己決定

○ 自立＝相互依存の中で生活を編み直す過程

相互依存を前提としながら、主体的な生活が可能となる条件を整える営み

多様な人と繋がる 受援力・支援力

・ケアを負担であると決めつけない

多様な人がそれぞれの特徴を認め合い、よわよわしながら平気で生きていく。

共生社会への理解・共感

(2) 主体形成の「総合性」

人間の欲求充足過程のすべてにわたる問いかけ

どういう暮らしがしたいか

自分は何があれば幸せか

生活欲求をもつ

「これだけは譲れない」

「私はこうありたい/こうなりたい」と言う/聴く



そのために何をどのように整えるか

方法 知識 スキルの習得



欲求の充足 できるかも できた 意識・意欲

日々の営みに対する選択を、意識的に、主体的に、積み重ねる
「やりきる力」「協力する力」「過程を味わう」「失敗から学ぶ」

「生活欲求をトータルに捉える視点」の獲得は

人間の欲求充足のプロセスは、① 欲求形成、② 選択肢の認識、③ 資源の調達・活用、④ 生活実践、⑤ 充足・意味づけの5段階で行われる。

①と⑤は、その人固有の領域で他が代替することはできない。

②、③、④の段階は社会化・商品化・制度化が進行する領域。この全過程を分断せずに捉える

当事者の観点で課題を捉える、選択肢を示す、
課題解決に向かってその人自身が最も良い選択肢を選ぶように助言・支援する

その人自身のエンパワメント

与えられた環境、選択肢、現在の価値観の中で幸せを求めて選択するだけでなく、
社会に暮らしのかたちを合わせるのではなく、既存の枠組みを超えていく。

「わたしはこういう生活がしたい」決めつけない、問う

二者択一を超えた複数の視点・多様な解

(3) 個人-家族・家庭生活—地域コミュニティを 一つの視野におさめる「総合性」

家政学

活動の目的 (Aim) :

個人・家族・コミュニティ (Individuals, Families and Communities) の
最適かつ持続可能な生活の達成

手段 (Goal) :

個人・家族・コミュニティの
エンパワー(Empowerment)

福祉の向上 (Well-being)

権利を擁護し、社会にひろげる (Advocate)

(IFHE Position Statement 2008)

「個人-家族・家庭生活―地域コミュニティを 一つの視野におさめる視点」の獲得は

個人の「できる」「できない」を問題にするのではなく、新しい生活資源を発見し、
生活弱者（支援が必要な人）は誰なのかという問いに対して新しい答えを示す

個人、家族・家庭生活、地域コミュニティに広がる新しいパートナーシップをつくる
環境は所与のものとしてではなく、人間が働きかけながら再構成する対象であると捉える
生活環境を整えることによって課題を乗り越えることができるようにする
その課題解決だけに留まるのではなく、それを通じて生活力を高め
問題回避、予防ができるようになる

個人や家族・家庭生活の課題を個人の責任として解決する方法ではなく
社会的な共通課題としていく

3. 家政学の3つの総合性から導びかれる 家庭科教育の共通基盤

それを、領域を貫いて共有することが鍵となる



家政学の3つの総合性から導びかれる 家庭科教育の共通基盤

領域を貫く「家庭科のWorldview」

- ①人は生涯にわたって発達し続ける存在である
生涯にわたって発達していくという自分の可能性を信じる
自分の中にある可能性は、隣にいる人にも、家族、高齢者にも備わっている
- ②「生活欲求の全般にわたる関心・意欲」
とは？ から始めて、 なにを？ どうやって？と進んでいく問い
- ③「環境は変えられる」「環境をつくり変える」

具体的にどういうことか 「小学校家庭」で検討してみる

生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

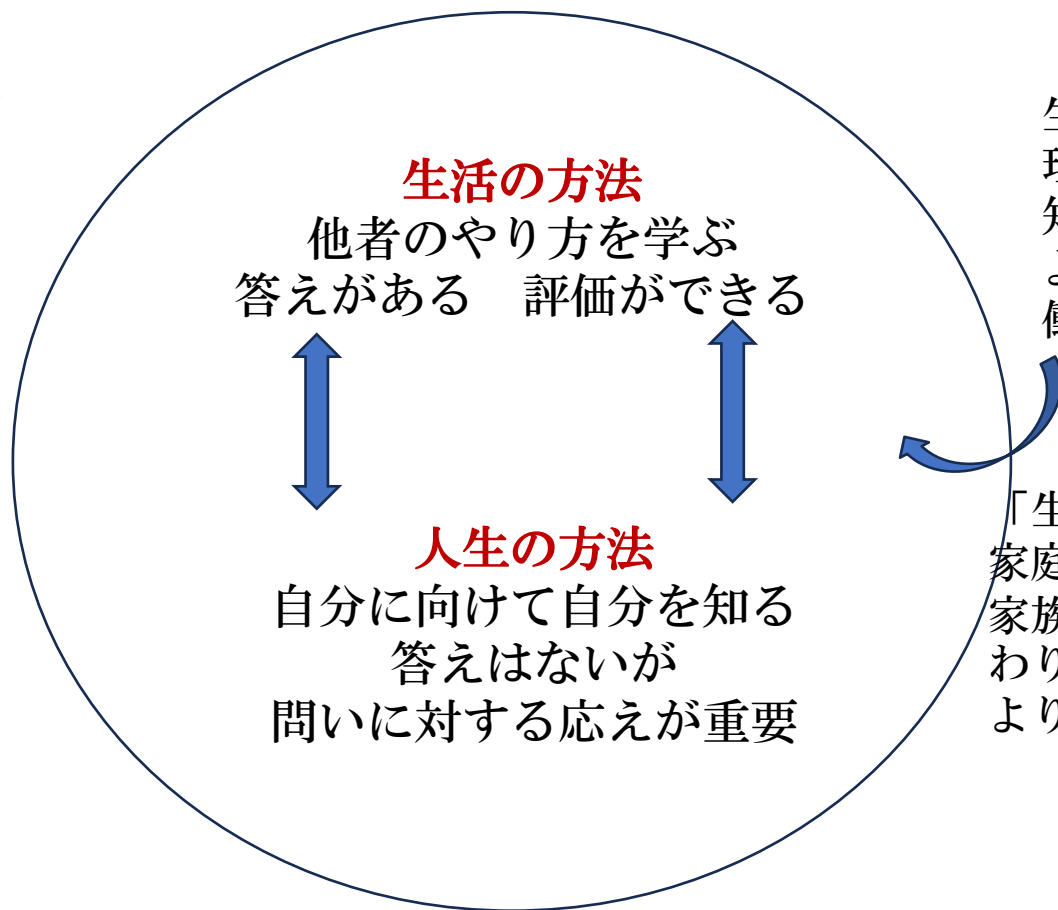
- (1) 家族や家庭，衣食住，消費や環境などについて，日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに，それらに係る技能を身に付けるようにする。
- (2) 日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し，様々な解決方法を考え，実践を評価・改善し，考えたことを表現するなど課題を解決する力を養う。
- (3) 家庭生活を大切にすることを育み，家族や地域の人々との関わりを考え，家族の一員として，生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。

目標に含まれている2つのこと

両者は互いに絡み合って“家庭科の知”となる

この円形を豊かにすること

科学的な知識・技能の習得と
いう要素
観察・実験
問題解決能力を育てる
科学的な見方、考え方



生活の方法を生活観に照らして
理解し、人生の方法を科学的な
知識、技術・技能の裏付けに
よって習得する。その往還をつくる
働きかけ：家庭科の授業

「生活観」を身に付けるという要
家庭生活を大切にする心情を育む
家族や地域の人々との協働的な関
わり。
よりよい生活をめざす



円形を豊かにすること：家庭科の目標達成へのアプローチ

どの領域における学習においても、「家庭科のWorldview」を基盤におく
それを問い続けながら授業を展開する

- ①人は生涯にわたって発達し続ける存在である
生涯にわたって発達していくという自分の可能性を信じる
自分の中にある可能性は、隣にいる人にも、家族、高齢者にも備わっている
- ②「生活欲求の全般にわたる関心・意欲」
とは？ から始めて、 なにを？ どうやって？と進んでいく問い
- ③「環境は変えられる」「環境をつくり変える」

内容A 家族・家庭生活

(1) 自分の成長と家族・家庭生活

ア 自分の成長の自覚，家庭生活と家族の大切さ， 家族との協力

(2) 家庭生活と仕事

ア家庭には，家庭生活を支える仕事があり，互いに協力し分担する必要があること
生活時間の有効な使い方について理解すること。

イ家庭の仕事の計画を考え，工夫すること。

家族との協力、効率的な家庭の仕事のやり方、家族での分担について考える前に

家族はみんな生涯発達をしている

「どのような生活がよい生活なのか」

自分にとって「家庭の仕事」とは

今の自分の生活は変えられる

A (3) 家族や地域の人々との関わり

(3) 家族や地域の人々との関わり

- (ア) 家族との触れ合いや団らんの大切さについて理解すること。
- (イ) 家庭生活は地域の人々との関わりで成り立っていることが分かり、
地域の人々との協力が大切であることを理解すること。

地域の人々とともに快適に生活するための工夫、実践について考える前に

(生活の中の音→うるさい、近所迷惑にならない→

どういうことに注意したらよいかを考えるという筋書きにしないために)

地域の人々はみんな生涯発達している人

自分たちの地域にどんな音があったらいいだろう

地域は変えられる

B 衣食住の生活

「科学」的な知識・技術の習得

栄養に関する知識 調理に関する技術・技能 栄養学による合理的な食事

被服の機能性や管理

住宅設計の改善

モデルの理解 科学性 客観性

科学的な知識、技術・技能の裏付けとの往還でつくる

気持ちよく目覚め 朝の光を浴び 新鮮な空気を吸い

朝食をおいしく食べる…というような日常生活の実感

これが好きという感覚

自分が人間らしい暮らしをする

それをまわりにも広げて 社会を変える

C 消費生活・環境

(1) 物や金銭の使い方と買物

- (ア) 買物の仕組みや消費者の役割が分かり，物や金銭の大切さと計画的な使い方について理解する
- (イ) 身近な物の選び方，買い方を理解し，購入するために必要な情報の収集・整理が適切にできる

(2) 環境に配慮した生活

自分の生活と身近な環境との関わりや環境に配慮した物の使い方などについて理解する。

物の選び方，買い方，使い方を考え，工夫する前に、
どういう生活がしたいのか。

環境に配慮した物の使い方を考える前に、与えられた選択肢をうまく選択することの前に
充足した生活とは。そもそもどこまであれば十分なのかを考える

4. まとめー ディスカッション

ここまでお話してきたこと

1. 高まる子どもたちへの期待

家庭科を通じて子どもたちを自由にしたい

そうすると決まっているから その方が得になるらしいから

という理由で決まり事を守る 社会の枠組みの中で生きる

からの解放 そのために 根っこを太く ← 知識

← スキル

← 経験

2. 「家庭科で行う」から「家庭科を行う」への転換を

3. 「家庭科を行う」ために

「家政学の総合性」から家庭科教育の共通基盤を導く

4. 家庭科教育の共通基盤から展開する家庭科の学び

4. まとめーディスカッション

- 家庭科は

Efficiency：手段の合理性を追求しながらも、
その先にある Sufficiency：生活の目的や充足の合理性 を問い続ける。

- 家庭科は、一人ひとりが自らの生活資源と可能性(ケイパビリティ)に気づき、
それらを育みながら、自分の生活や職業生活、そして人生を主体的に築いていくことを支える。



主な参考文献・参考資料等

-
- 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」令和6年12月25日
 - 中央教育審議会教育課程企画特別部会『論点整理』令和7年9月25日
 - 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領』
 - 第22期日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分野の参照基準検討分科会（2013）『家政学分野の参照基準』
 - International Federation for Home Economics (2008). *Home Economics in the 21st Century: Position Statement*.
 - Cohen, M. (2024). *Planetary Home Economics and the Pursuit of Sustainable Lifestyles*. Presentation at the XXV World Congress of the International Federation for Home Economics, June 24, 2024.
 - ドライリンガー, D. (2022) 『The Secret History of Home Economics—家庭の中から世界を変えた女性たち』東京堂出版
 - ギリガン, C. (2022) 『もうひとつの声で—心理学の理論とケアの倫理』川本隆史・山辺恵理子・米虫正訳, 風行社
 - 工藤由貴子 (2024) 「『人生100年時代』の生活のマネジメント」『持続可能な社会と人の暮らし』持続可能な生活研究会編, 建帛社
 - 工藤由貴子 (2024) 「『人生100年時代』を支える家庭科の学び」『家庭科教育が拓く地平』日本家庭科教育学会編, 学文社
 - 工藤由貴子 (2026) 「家政学は生活の中の課題をどう捉えるのか—実践知理論化の試み」シリーズ新しい生活様式と家政学 日本家政学会誌 77(4)